クリスマスツリーとユールログと ビュッシュ・ド・ノエル

クリスマスツリーを飾る風習は、1400年代のドイツで始まりました。
その起源となったのが「ユール・ログ」、クリスマスの丸太です。

★★★★★

ゲルマン民族の冬至のお祭り「ユール」では
森で大木を伐採して、リボンで飾り、一族の男性総動員で
家まで運びました。この時、最年長者と最年少者が
この丸太に乗って祈りを捧げます。
そして家に着くと薪にし、炉にくべて燃やしました。
この薪には魔力があるとされ、冬至を境に
太陽が夜の闇に打ち勝つように、その輝きを
助けるとされました。また、火の影に体を映して
来年の健康を占ったり、灰を畑や厩にまいたり
しました。灰は病気に効き目があり
豊作や多産を促すと信じられていました。

★★★★★

「ユール・ログ」には樫（かし）の木が使われていました。
冬でも枯れない常緑樹で、生命の象徴とされて
いました。樹木信仰の強いドイツ、キリスト教が
勢力を増すにつれて、父と子と精霊の「三位一体」
を知らしめるために、きれいな三角形を成し、
同じ常緑樹である樅（もみ）の木に、木を差し替えることで
土着の冬至のお祭りとクリスマスを融合させていきました。

クリスマスツリーとして樅の木が飾られるようになったのは
1419年にドイツのフライブルクで
パン職人の信心会が聖霊救貧院にツリーを飾ったのが
始まりと言われていますが、
宗教改革で知られるマルティン・ルターが
子供部屋に飾ったツリーが最初とする説もあります。
ルターは星に見立ててロウソクを飾ったそうです。
これも、太陽が力を回復する象徴として
受け継がれてきました。クリスマスツリーは、
数百年、ドイツ国内のみで飾られていましたが、
ドイツからの移民や王室の国際結婚などにより
ヨーロッパ、アメリカへと広まっていきます。

★★★★★

一方、「ユール・ログ」の薪の風習は、
中世以降、ヨーロッパ各地に伝わりました。
12月25日の降誕節の朝に火を点けて
１月６日の公現節まで「十二夜」の間
火を絶やさず、燃え続けるようにしました。
「ユール・ログ」の風習は19世紀に入ると廃れましたが、
フランスのクリスマスの伝統菓子「ビュッシュ・ド・ノエル」に
新しい年の家族の健康と豊穣への願いが
受け継がれています。

Joyeux Noël ! Chocolatier La Pierre Blanche